

## お 知 ら せ

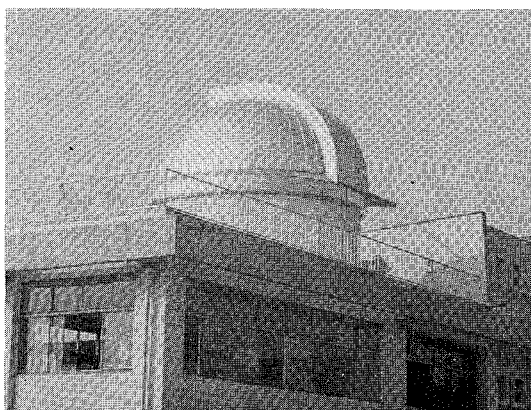
## 宇宙分野の日米第1回専門家会議

上記の会議が昭和53年12月12日から4日間にわたって東京で開かれ、NASAから10人の使節団が来訪した。目的は、将来の応用あるいは純粋科学の面で、NASAと日本が協力して活動できる分野がありそうかどうかについて、定期的に検討会をもとうというもので、純粋科学分野はNASA側が4人、日本側は小田・大林・野村(宇宙研)・斉藤(文部省)の4人が出席した。NASA側から提案された検討事項は、(1)大平洋横断大気球計画、(2)STARLAB計画、(3)X線天文台、(4)宇宙線天文台、の4項であった。これに対し、(1)と(3)は日本側でも考えていたことと興味が一致するので、検討を進めることとなったが、(2)と(4)は、興味はあるが、更に多くの研究者の意見を聞かないと検討を進めるべきかどうか確かしかねる、ということになった。一応の答は3月に予定されている第2回会議で報告されることが望ましいが、必ずしもNASA側の事情のみに左右されて拙速な結論を出すことは必要でないと思われる。

特にSTARLAB計画は、1m口径の紫外用リチウムクリスタル望遠鏡を、スペースシャトルに搭載して、年間2週間程度の飛行をさせ、0.3"の分解能で視野30'の直接写真をUV域で撮るのを主目的とし、また9000Åま

での領域でスペクトルを撮ることを狙っている。いずれもSTではやり難い重要な仕事で、STと相補的な役割を果たす計画であり、将来の星間空間物理学、銀河系天文学、宇宙論などに大きな役割を果たすことは間違いない、NASAではすでに一応のfeasibility studyを済ませ、具体的なhardwareの考察に入る段階で、日本が分担者となることを望んでいる。総経費は約50億円と見積られ、STの飛んでいる1980年代後半を実現目標に据えている。例えば、日本で直接撮影用カメラとか主光学系を分担して、その額に見合った観測時間を貰うという参加形態が考えられる。出来上ったSTARLABはNASAの常設装備として、改修しつつ長期にわたって利用される。分担額は興味ある機器によるが、総額の1/10の位であれば、製作上、観測上のman powerと見合うのではないと思われる。将来への展望という点では、十分に必要性を認めながらも、なかなか思うにまかせない光学天文の分野にとっては、宇宙圏からの観測に積極的に取り組んでみる絶好の機会ではないだろうか。ご意見をお持ちの方々は、どんなものでも結構ですから、東大天文学教室の小平または宇宙研の小田氏まで、お寄せ下さい。長期的な事はいずれ天文研でも議論される予定です。資料ご希望の方は小平まで、なお、応用分野には電波研の川尻氏、東京天文台の古在氏も出席された模様です。

(小平桂一)



## ASIBO 営業品目

天体望遠鏡ならびに双眼鏡

天体写真撮影用品とパーツ

望遠鏡各種アクセサリ

観測室ドームの設計・施工

ASTRO 光学工業株式会社

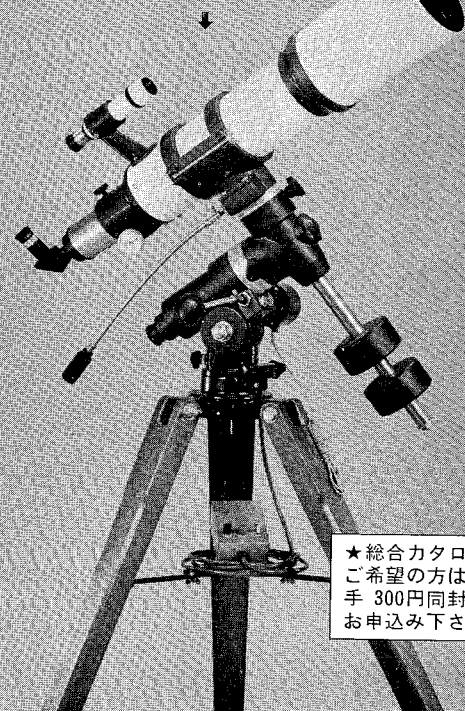
〒170 東京都豊島区池袋本町2-38-15

☎03(985)1321 振替口座東京 5-52499番

## 彗星捜索用望遠鏡

R-83型セミアポ3枚玉

(D=80%・f=7.5)



★総合カタログ  
ご希望の方は切  
手 300円同封し  
お申込み下さい